

赤十字NEWS 3

Japanese Red Cross Society NEWS

MARCH.2024.#1006

特集 ▶ P.2

能登半島地震、
ボランティアの活動と給水衛生支援

被災地へ 希望を届ける〈2〉



TOPICS

ACTION! 防災・減災 プロジェクトがスタート!
上白石萌音さんと学ぶ特設サイトが開設

能登半島地震への義援金呼びかけも!
宮城野親方(元横綱・白鵬関)が献血運搬車を寄贈

..... P.4-5

連載

国内災害救護 まるわかり辞典 P.4

献血ハートフルストーリー..... P.5

AREA NEWS

[全国] 「1円玉募金」を活用した海外支援事業
ネパール・バヌアツからの活動報告

[千葉] 日赤支部・病院・血液の事業を
まとめて体験できるインターンシップ

[山形] 輸血経験のある生徒らが呼びかけ
「青春!けんけつワークショップ」開催

/他 P.6-7

WORLD NEWS

トルコ・シリア地震から1年。
被災者の心の復興を支えて

..... P.8

Present!!

大阪タオル工業組合
「泉州タオルギフト」

プレゼント!
5名様

詳しくは
P.7をCheck! ▶



特集 能登半島地震、ボランティアの活動と給水衛生支援 被災地へ希望を届ける〈2〉

災害発生直後から動き出した日赤の被災地支援。赤十字ボランティアも被災地内外でさまざまな支援を行っています。救護物資運搬や救護班のサポートを行うなど、少しでも被災者の力になればと活動した赤十字ボランティアの数は延べ1368人(※2月19日時点)。また、日赤は国際人道支援の長年の経験で培ったノウハウを生かし、断水が続く能登半島地震の被災地に給水衛生の資機材を運搬、プールの水を浄化して使用する洗濯機や温かいシャワーブースの設置などを行いました。これらの活動の一部をご紹介します。



①日赤石川県支部 赤十字安全奉仕団 池田 幸彦さん(左)、小倉 誠吾さん
②同支部 防災ボランティア・リーダー 北村裕一さん



石川県内の赤十字ボランティア

日赤石川県支部の赤十字安全奉仕団に所属する池田幸彦さんと小倉誠吾さんは、支部が備蓄している救護物資をトラックいっぱい詰めて、災害対策本部が指定する場所に運ぶボランティア活動を行いました。通常、安全奉仕団は、救急法や水上安全法などの普及活動を行い、池田さんも小倉さんも講習の指導者を務めています。しかし災害などの緊急事態には、赤十字の一員として幅広い活動に参加します。池田さんは元日の夜から石川県支部に入り、災害対策本部の立ち上げにも協力。赤十字ボランティアとして活動することに

ついて「このマークを見ただけで“今日は来てくれて、ありがとう”と声をかけられます。全国から日赤救護班が石川に集まっています、活動中にすれ違えば、同じ赤十字マークを着けた仲間だから、互いに目を合わせたり、手を振り合ったりして、一緒に活動しているチームだ、と感じて励みになります。また、小倉さんは「全国から救護班に来ていただいて、ありがたい。石川県民として、赤十字が活動しているのを見ると安心感があります。(話を聞いた1月9日時点は県外ボランティアの受け入れ前)現地に行きたいと思っている人たちの分まで、日赤の仲間の代表として活動したいです」と語りました。

同じく同支部で防災ボランティアを長年続けている北村裕一さんも元日から支部に駆けつけ、日赤職員と一緒に活動を開始。現在は各地の災害ボランティアセンターの運営サポートで飛び回っています。防災ボランティア・リーダーとして防災セミナーの講師も務めてきた北村さんは「ある避難所で防災セミナーの受講者に話しかけられ、災害前に避難所生活の課題を聞いてよかったと言われました。でも、そのような方は住民のほんの一部です。この災害では、今後セミナーで話すならこれも伝えよう、と気づくことがたくさんある。赤十字のネットワークで伝える機会があるなら、より多くの人にその気づきを伝えたい」と話しました。

ISHIKAWA

県外からの赤十字ボランティア

「人を救いたい」思いが ボランティア活動の原動力

今回の災害では発災後1カ月たっても多くの地域で災害ボランティアの受け入れ態勢が整わず、救助や支援活動の障害となる深刻な渋滞もあり、県外ボランティアが被災地で活動するのは難しい状況でした。そんな中、救護班と共に行動することで交通事情にも配慮し、被災地に負担をかけない自己完結型支援を徹底した「救護班同型のボランティア」が複数の県から被災地に向かいました。この方々は日頃から日赤の救護訓練や各種研修に参加して、知識と経験を豊富に積んだ救護ボランティアのエキスパート。その活動例を紹介します。



棟方さんを送りだし、京都に残った「赤十字レスキューチェーン京都」のメンバーは救護物資の積み込みなどの後方支援を行った

from 群馬



柔道整復師の技術で避難者の疲れを癒やす田島委員長

from 京都



避難所巡回中、水くみに困っていた方のサポートをする棟方さん

寝袋持参で被災地へ 群馬県接骨師赤十字奉仕団

日赤群馬県支部救護班に帯同したのは、群馬県接骨師赤十字奉仕団の田島隆行委員長。救護班と訪れた先で、避難生活の疲れを癒やす術を学んだ。施術を受けた方からは「慣れない生活でたまの疲れが楽になった」「年明けから大変な日々。話を聞いてもらえてうれしい」などの声。数々の災害救護訓練に参加してきた「備え」が生かされました。

阪神・淡路大震災の教訓を生かす 赤十字レスキューチェーン京都

阪神・淡路大震災の翌年に発足した奉仕団「赤十字レスキューチェーン京都」。同奉仕団を代表して棟方禎久さんが日赤京都府支部救護班(第1班)に帯同。救護班が避難所に向かう車の運転、医療資機材の準備と運搬、救護班の生活全般も支えました。普段から災害や救護にまつわるマルチなボランティア活動を展開する同奉仕団ならではのお役目となりました。

Water supply & Sanitation support

赤十字の給水衛生支援

海外の避難民キャンプなどで実績のある「水支援」を展開

断水が続く七尾市からの要請で、日赤本社と3つの赤十字病院*から給水衛生支援チームが出勤し、国際救護資機材(ERU 資機材)を使用して活動しました。この支援は通常、海外の緊急救援での使用が想定されていますが、東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨災害でも実績があります。七尾市と調整し、人数の多い避難所で、かつプールのため水などの水源が使用できる2つの小学校を支援先に決定。水源調査から始まり、浄水と加温の機器を設置、加えて①手洗い場、②シャワー各2台、③洗濯機各2台を設置しました。

* 熊本赤十字病院、大阪赤十字病院、日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第二病院



(上) 雪の中、プールの水をくみ上げる日赤職員 (下) プールの水をシャワーに使うため浄水器を設置

Voice

自分はこの避難所の小学校出身で、若い自分がふさぎ入っていると周りも暗くなるから積極的に避難所運営の手伝いをしています。(地震から3週間、水道が使えず) こうして水が使えることがびっくり。震災前まで当たり前だったことが、一つ一つ奇跡のように感じられます。日赤の支援に感謝です!

山王小学校の避難者 松野拓海さん



プールの水を浄水して使う洗濯機が順調に稼働し、避難者の松野さん(左)と共に喜ぶ日赤職員

Voice

シャワーの温度調整が自分のできるのうれしい。このシャワーは使いやすいです。

和倉小学校6年生 れん君



Voice

発災後3週間たち、避難者にもストレスがたまっています。電気があるだけありがたいけれど、断水は大変で…。日赤の支援で、蛇口から水が出てくることに感動しました!

山王小学校の避難者

「防災ボランティア」とは?

赤十字の防災ボランティアは、災害が起きていない平時に訓練や研修を受け災害救護活動におけるノウハウを習得します。災害が発生すると、日赤の活動(情報収集、応急手当、炊き出し、安否調査、救護物資の輸送・配分、避難所の支援など)に参加。1日限りの支援ではなく、被災地を深く支援する赤十字の一員としての役割を担います。

詳しくはこちら

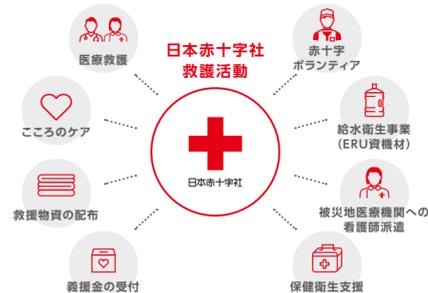
<https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/volunteer/>



能登半島地震における日赤の活動概要 『被災地支援8つの柱』

本災害では、救護班の派遣(延べ297班)や救護物資の配布を含め右図にある8つの項目で支援活動を展開。救護班とは別に、被災地医療機関に全国の赤十字病院から看護師延べ84人を派遣したり、給水衛生支援を行うなど、活動は多岐にわたります。

※数は2月19日時点のもの



国際救護資機材(ERU 資機材)とは?

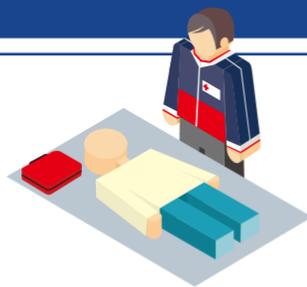
日赤は海外での大規模災害などの発生に備え、いつでも出勤可能な国際支援の人材と資機材とをセットにした「緊急対応ユニット=Emergency Response Unit (ERU)」を有しています。ERUが出動することで、インフラの環境が整わないような被災地においても医療や給水衛生支援などを迅速に展開することができます。今回の給水衛生支援でもその一部の資機材が活用されました。

詳しくはこちら

<https://www.jrc.or.jp/international/about/saigai/>



T O P I C S



1 TOPICS

ACTION! 防災・減災 プロジェクトがスタート! 上白石萌音さんと学ぶ特設サイトが開設



上白石さんが救急法講習に参加するWEB CM

防災意識を高め、万が一のときに命を救うための行動につなげる啓発プロジェクト「ACTION! 防災・減災 一命のために今うごくー」。3月の同プロジェクトでは、災害などに備えて“今”何ができるかという視点で、**防災・減災のための情報を発信**しています。今回、公開した新WEB CMでは、**日赤のアンバサダーである上白石萌音さんが、胸骨圧迫やAEDを用いた救命処置など救急法の講習を体験**。万が一のときに身近な人

を救うための方法を知っていることや周囲と協力して応急手当てをすることの大切さを学ぶシーンを見ることが出来ます。

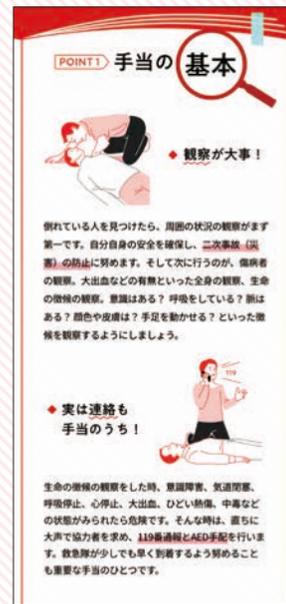
また、特設サイト「SAVE365 Magazine」では、事故や災害などから自分自身を守り、

けが人や急病人を正しく救助するための3つのポイントについて紹介。上白石さんが読者と同じ目線で救急法の基本について考える「**もしもの時の3つの備え 救急法ハンドブック**」や幅広い年齢層に人気のある雑誌「anan」「Hanako」「POPEYE」とコラボした「**健康生活支援講習**」「**幼児安全法**」「**水上安全法**」に関する記事も掲載。同プロジェクトをきっかけに、日頃から備えることの大切さを学んでみませんか。

■モバイルサイト



上白石さんと共に救急法などを学べるサイト



イラストを交え救急法を分かりやすく解説

プロジェクトの詳細は特設サイトでご案内します
<https://www.jrc.or.jp/lp/save365/>



そのとき、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するコーナー。
今回は「**突然の災害から命を守るために**」です。

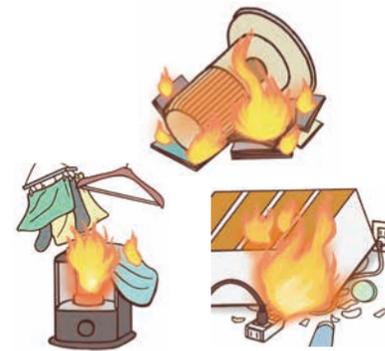
今回は、いつ、どこで起こるか分からない災害から、自分自身や大切な人を守るための日頃の備えについて、赤十字防災セミナーの内容から一部を紹介します。

まず「地震」の発生時、「**倒れるモノ**」・「**落ちるモノ**」・「**割れるモノ**」・「**動くモノ**」から身の安全を確保することが大原則です。体の上に倒れる・落ちるものはないか、逃げるときに通路や扉をふさぐ可能性がある家具なども確認しましょう。これらの家具転倒の防止は、日々の生活の中で少しずつできる大切な防災です。特に寝ているときはすぐに行動できないため、まずは「**寝る場所の周辺**」の安全を**チェック**しましょう。防災セミナー

では「**家具安全対策ゲーム (KAG)**」や小学生を対象にした「**うちのきけん**」などで家の中の安全対策について考える機会を提供しています。

次に「**地震による火災**」の対策は、**火事の原因をできるだけ作らない**ことが被害の拡大を防ぐ基本です。地震が発生したら、まず身の安全を確保してから、ガスコンロ、ストーブなどの火を消しましょう。また、避難をする場合はガスの元栓を締めるとともに通電火災を防ぐため、電気のブレーカーを切りましょう。万が一出火してしまったら、初期消火が大切。消火器などの道具を備えておくことや使い方を覚えておくこと、また延焼を防ぐために、ご近所などに助けを求め、力を合わせて消火することも必要になります。初期消火などの情報は消防庁公式サイトでも確認できます。

災害への備えや行動は、「空振り」しても構わないもので、大切なのは命を守れたという結果です。「**いつかやろう**」ではなく、**日頃から備えを意識**して、できる範囲で行動を起こすことが、大切な命を守ることに繋がります。



暖房器具などの転倒、落下物の暖房器具などへの接触、傷んだ配線の接触などによる出火が原因とされています。



赤十字
防災セミナー



参考:消防庁ホームページ
<https://www.fdma.go.jp/>
「住宅用消火器」

2

TOPICS

能登半島地震への義援金呼びかけも! 宮城野親方(元横綱・白鵬関)が献血運搬車を寄贈

輸血用血液製剤を運ぶ献血運搬車は、輸血が必要な人々を救うために全国に配備されています。この献血運搬車の中には、角界の名力士から寄贈された車両が。最初に寄贈したのは昭和の大横綱・大鵬関。1969(昭和44)年、社会問題になった売血から「善意による無償の献血」への移行期に、献血運搬車の不足を

耳にした大鵬関の「社会に恩返ししたい」という思いから始まりました。そして、大鵬親方が亡くなった後は、横綱・白鵬関(現・宮城野親方)がその遺志を継ぎ、「大鵬号」として2016(平成28)年まで計73台を寄贈。翌年からは「白鵬号」として引き続き寄贈され、2月12日、白鵬号の3台目の贈呈式が両国国技館で行われました(コロナ禍中、贈呈は一時中断)。

本贈呈式は、「第14回白鵬杯世界少年相撲大会」とともに開催され、会場では能登半島地震への義援金の募金活動も実施されました。白鵬杯は、宮城野親方が主催する国際親善交流相撲大会で、日本全国と世界中からおよそ1000人の子ども力士が参加、現役力士も大会運営へ多数協力します。今年は、海外10カ国を含む、約1100人が参加。1月の能登半島地震を受けて、北陸地方からの出場者には、白鵬杯実行委員会が支援を行った他、会場での募金活動には俳優の富栄ドラムさんも加わりました。



多くの方にご寄付いただき、
35万150円の義援金が集まりました!



会場に駆けつけた
俳優の富栄ドラムさん

令和6年
能登半島地震
災害義援金は
こちらから



宮城野親方(元横綱・白鵬関)による献血運搬車の贈呈式

献血ハートフルストーリー vol.3

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

献血を通して、人と人の思いが繋がっていく場所



今月のひと

profile

宮城県赤十字血液センター
社の都献血ルームAOBA
採血係 看護師
よこやま ひとみ
横山 瞳さん

採血は、私たち看護師や医師でなければ行えないものです。また、協力者の健康状態の確認や、採血中や採血後の体調チェック、さらに献血の不安を和らげることも、看護師としての大切な仕事です。私は、看護学生時代に頻りに献血に通っていて、あるとき、献血中に具合が悪くなったことがありました。そのとき、看護師さんが「大丈夫よ」と声を掛けながら付き添ってくれて、その温かさ

に心打たれ、献血ルームの看護師を目指ようになりました。ただ、宮城の献血ルームは看護師の求人がなかなか出なかったこともあり、私は産婦人科や消化器外科といった医療現場で経験と技術を身につけてから、念願叶って入職しました。

献血ルームは、血液を提供してくれる人と、安心安全な採血に注力するスタッフの間で温かい交流が生まれる場でもあります。例えば、2週間に1回できる成分献血に熱心に通われる方もいて、多いときは月に2回ほど会うため、顔なじみになって世間話やご家族の話題に花が咲いたり、私が育児休業から復帰すると「しばらく見ないと思ったら育休だったんだね」と優しく声を掛けてくれる方もいます。一方で、毎月来てくれていた方が来なくなると私たちも心配になります。また、献血が可能な年齢の上限になり、最後の献血に来てくれた方へルームの職員でお礼を言うとき

に涙腺が緩むこともあり、献血を通して人と人の温かい関係が紡がれていると感じます。献血をしたことがない方には、献血ルームは少し怖い場所と思われるかもしれませんが、少しでも不安があったら、不安が解消できるように努めますので、まずは一度訪れて、その温かい空気を感じてほしいと思います。

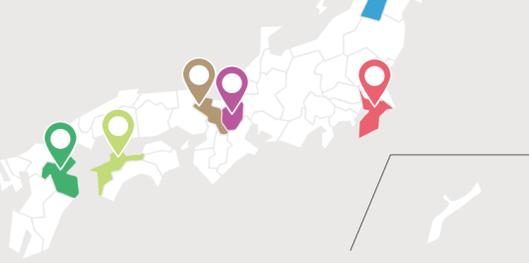


At work

AREA

エリアニュース

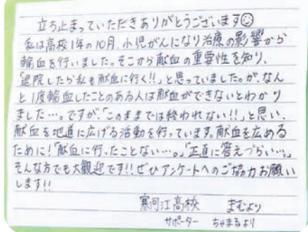
NEWS



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。

山形

輸血経験のある生徒らが呼びかけ「青春!けんけつワークショップ」開催



山形県赤十字血液センターでは、1月28日に高校生主催による「青春!けんけつワークショップ」を開催しました。このイベントは、小児がんを克服し輸血経験のある生徒を中心に有志4人が集まり、「いのちのバトンプロジェクト」として始動。献血の大切さを広めるため、各方面にたくさんの協力を得ながら実施に至りました。

当日は、小学生から大学生まで約30人が参加。献血する側、輸血される側それぞれの人生をたどる2種類のゲームを同時に体験しました。ゲームでは、ゴールを目指す中で、時には献血、輸血の立場が入れ替わることも。参加者からは、「献血に対して苦手意識があったけれど、イベントを通して行動を起こそうと思った」など、意欲的な声を聞くことができました。

千葉

日赤支部・病院・血液の事業をまとめて体験できるインターンシップ



日赤千葉県支部では、1月10日・27日に成田赤十字病院と千葉県赤十字血液センター合同のインターンシップを実施しました。医療救護班として能登半島地震で活動した職員の話や、被災地で展開する仮設診療所の設営や、通信網が遮断された想定で無線を使って災害対策本部と連絡を取り合うなどの疑似体験を行いました。また、津田沼献血ルームにて献血の呼びかけに参加するとともに、「平日の献血者を増やすためには」というテーマでグループワークも実施。能登の報道で救護班の活動を知った参加学生からは「日赤が被災地に資機材を持ち込み、地域と連携しながら救護活動を展開している様子が分かり、活動を身近に感じることができた」などの感想が寄せられました。

秋田

13人の指導者が誕生 防災教育の指導者養成研修を開催



2月3～4日の2日間、日赤秋田県支部では、赤十字講習のボランティア指導員と施設職員を対象に、防災セミナーの指導者を養成する研修を開催しました。能登半島地震で防災への意識が一層高まる中、研修には13人が参加。被災者の体験談を読んだり、防災マップを作ったりと、各カリキュラムの体験や演習を通して、防災教育の知識を深めました。研修を終えた参加者からは、地域コミュニティにおける「自助」と「共助」の力を高め、災害から命を守るために、県内各地で防災セミナーの普及に努めます。

大分

京都

滋賀

JRCの呼びかけやクルーズ船のチャリティー運航も能登半島地震義援金への協力集まる



元日に発生した能登半島地震への義援金を呼びかける活動報告が、全国各地から届いています。日赤大分県支部(1)では、赤十字特別奉仕団や大分・臼杵市内の高校6校・24人のJRCメンバーが、1月21日、28日とそれぞれの日程で、JR大分駅前前で募金活動を実施しました。一般の方からのカイロの差し入れや励ましの声も多かったです。約9万円の義援金が集まりました。

京都府支部(2)では、1月27日に四条河原町交差点にて、JRC高校生メンバーおよび指導者計40人による街頭募金活動が行われました。参加メンバーの中には、地震当日、石川県七尾市の祖父の家で被災した大上凜乃さんの姿も。

「地震が発生した日は近くの小学校へ避難しました。食べ物の配布もまだなく、周りの方に分けてもらって不安な一日を過ごしました。現在は祖父母も自宅に戻っていますが、まだ避難所生活を送っている方もたくさんいます。実際に被災地を見たからこそ、何か力になりたいと思い、参加しました」と語り、仲間と共に協力を呼びかけました。

滋賀県・彦兵衛造船所(3)では、1月28日、29日の2日間、「瀬田川・琵琶湖リパークルーズ」チャリティー運航を実施しました。106人が乗船したその収益と従業員募金は、滋賀県支部を通じて全額被災者の支援に役立てられます。

愛媛

赤十字救急法で人命救助 看護学生へ表彰授与



昨年10月、愛媛県・聖カタリナ大学内において、心肺停止の方への救命処置を行ったとして、同大学人間健康福祉学部看護学科の学生が松山市中央消防署・消防署長から「人命救助表彰」を受けました。学生たちは、全員が日赤愛媛県支部において赤十字救急法の講習を受講済み。当日は教員とも協力し、講習で学んだことを生かした見事な連携で、「命を救う」ことに成功しました。

常任理事会開催報告

令和6年1月26日、令和5年度第9回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、令和6年能登半島地震にかかる日本赤十字社の対応等、新たな人事戦略「トータルリワード」の具体的な施策(取組みの進捗)、国際赤十字・赤新月社連盟新会長の選出及び今年度の国際赤十字・赤新月運動の主要会議、仙台赤十字病院と宮城県立がんセンターの統合にかかる基本合意について、それぞれ報告しました。

第103回代議員会開催報告

令和6年3月15日(金)、午後2時30分から新館が関ビル「全社協・瀬尾ホール」(東京都千代田区蔵が関3丁目3番2号)において第103回代議員会を開催し、下記の事項を付議いたします。令和6年3月1日

記

第1号議案 役員選出について
第2号議案 令和6年度事業計画について
第3号議案 令和6年度収支予算について

(6月3月号読者アンケート 質問項目)

- [A] 日赤の「会員」ですか
ア. 会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く)
イ. 会員ではない
- [B] 赤十字について知っている活動はどれですか
※下記選択からア～ケの文字をご記載ください。複数選択可
ア. 国内災害救護 イ. 国際活動 ウ. 赤十字病院
エ. 看護師等の教育 オ. 献血(血液事業)
カ. 救急法等の講習 キ. 青少年赤十字
ク. 赤十字ボランティア ク. 社会福祉
- [C] 今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア. とても理解が深まった イ. ある程度理解が深まった
ウ. 少し理解が深まった エ. 以前と変わらない
- [D] 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま イ. A4サイズ
ウ. 小冊子(A5 148×210mm)サイズ
- [E] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 イ. 2カ月に1回 ウ. 3カ月に1回
エ. 半年に1回
- [F] 赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン(オンライン)で読みたいですか、いまままでどおり紙で読みたいですか
ア. オンライン イ. どちらかというオンライン
ウ. (オンラインと紙の)両方 エ. 紙 オ. どちらかという紙
- [G] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望(任意)

全国

「1円玉募金」を活用した海外支援事業 ネパール・バヌアツからの活動報告



青少年赤十字(JRC)では、子どもたちが日頃のお小遣いを節約し、世界で苦しんでいる同世代の子どもたちのために募金活動をする中で「奉仕」の心を学び、その国の文化や生活に関心を持ち、自ら調

べることで「国際理解・親善」を進めています。2017年からは、「1円玉募金」によって、ネパールとバヌアツ共和国への支援事業が行われました。2023年度に1つの区切りを迎えたこの事業につい

て、各地の活動を報告します。

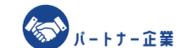
【ネパール】(1) 上下水道の整備が遅れている国では、水と衛生環境の整備を目指した取り組みを行いました。学校のトイレの修繕に加え、簡易水道や水タンク、ごみ箱を各所に設置。子どもたちへの衛生教育にも注力し、子どもたちが得た学びを家庭やコミュニティの衛生環境向上に還元するための支援を実施しました。

【バヌアツ共和国】(2) 自然災害が多発するバヌアツ共和国では、学校のカリキュラムに防災教育を組み込んだり、避難訓練や救急法キットを配布するなど、人々の防災意識とレジリエンス(復元力・回復力)を高めるための支援を行いました。その支援のさなか、2023年3月には、バヌアツ諸島を連続してサイクロンが襲い、北西部と北東部の島々に多大な被害をもたらしました。日赤では、引き続き「1円玉募金」による支援を継続していきます。

Present!!



生活に欠かせないタオルを、いち早く被災地へ!



大阪府泉佐野市から日本全国へ、災害時の緊急支援物資として高品質な国産タオルを届けたい、とタオルを備蓄する大阪タオル工業組合

タオルの街としても知られる大阪の泉州で、職人の手で生み出される「泉州タオル」をはじめ、高品質なタオルを提供している大阪タオル工業組合。同組合は日赤とパートナーシップ協定を締結し、東日本大震災以降、東北コットンを使用したタオルを製造・販売し、被災地域復興の支援にも力を入れてきました。また、商品の売り上げの一部を赤十字の活動資金として寄付しています。自然災害が多発する昨年、同組合では、生活に必要なタオルを迅速に被災地へ届けることを目指し、緊急支援物資としてフェイスタオル約1万枚を常に備蓄し、すぐに出荷できる体制を整えています。今年1月に起きた能登半島地震においては、泉州タオルの生産地全体で協力してフェイスタオル3万枚、バスタオル1万枚の支援を行うなど、その取り組みが多くの被災者を支えています。

5名様



泉州タオルギフト

136年の歴史がある後晒(あとさらし)タオルは抜群の吸水性と柔らかさが特徴

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。

- ①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS3月号を手に入れた場所(例/献血ルーム) ⑥3月号読者アンケートの回答(質問項目は右上の赤枠内)

※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3

日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS3月号プレゼント係

WEB応募/右の2次元コードからご応募ください。

3月29日(金) 必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから





トルコ共和国ってどんな国？

ヨーロッパと中東の間に位置し、東西に長く広がる国土を持つトルコ。同国の南に位置するシリア・アラブ共和国とともに受けた、大きな地震の被害は広範囲に及び、復興に向けて引き続きの支援が求められている。

トルコ・シリア地震から1年。被災者の心の復興を支えて

2023年2月6日にトルコ南東部を震源とする地震により、トルコやシリアの広い地域が甚大な被害を受け、約330万人が避難を余儀なくされました。その傷痕は、発生から1年たった今も、被災地の人々の暮らしに影を落としています。日赤 国際部でトルコ・シリア地震事業を担当する竹下葉月さんに、今のトルコの被災地の状況を聞きました。

地震から1年以上が経過しても 避難所、仮設住宅での生活が続く

今回の派遣では、1月8日から19日の日程でトルコに向かい、トルコ赤新月社(以下、トルコ赤)のスタッフと共に、日赤の給水衛生支援であるランドリー車(シャワーブースや洗濯設備を積んだ大型コンテナ車を12台配備)の設置場所や被災者の生活の様子を見て回りました。地震の被害が大きかった地域を車で走っていると、発災から約1年がたとうとしている今も、街の至る所で瓦礫が積まれたまま、あまり復興が進んでいないという印象でした。復興が進みにくい背景には、この**トルコ・シリア地震の被害が広い範囲にわたっている**ことがあると思います。単純な直線距離で約500kmに及び、日本では例えば東京都から岡山県近くまで届く広さです。トルコ政府は市民生活の再建に尽力していますが、**復興にはまだまだ時間がかかる**ように感じました。

一方で、ガジアンテップ・イスラヒエ地区にある約5000棟のコンテナ仮設住宅が設置された避難所では、スーパーマーケットが開設されるなど生活の基盤がある程度は整えられ、トルコ赤ではそのエリアにコミュニティセンターを設けて地域保健活動を実施したり、コンテナ図書館を設置する計画も進んでいました。また、国際赤十字は、被災者の生計支援や「こころのケア」にも力を入れています。生計支援とは、例えば農家の

人の耕作機械や店舗の設備の購入など、仕事を再開するための資金援助や、地震の影響で収入源がなくなってしまった家庭や高齢者への金銭的な支援などです。ただ、被災者それぞれの複雑な背景があり、全てを失って何かを始めることが難しい高齢者、家族が亡くなったり離れ離れになってしまった家庭など、多くの場合、再建への道のりはとても険しいようです。

被災者の一人一人の声を 拾うことで見える必要な支援

避難所の訪問では、コンテナ住宅で暮らす高齢の女性、エズテュルクさんに話を聞きました。彼女は地震による生活難が原因で夫と別れ、コンテナ住宅で娘や孫と暮らしています。訪問してみて、トルコ赤の担当者も驚くことがありました。彼女はトルコ赤からすでに振り込まれているはずの厳冬期対策の給付金について知らない、と言うのです。彼女の携帯電話にはショートメッセージで入金通知が届いていました。ところが、文字が読めないので内容が分からなかったのです。エズテュルクさんは**給付金の振り込みを知ると、安どと喜びのあまり、私とトルコ赤スタッフの手を強く握り**、「ありがとう。あなたたちの善意は、私の記憶の中の美しい場所として残ります」と、涙ぐみました。実は、赤十字の給付金はコンテナ住宅の被災者全員に配られたわけではなく、調査や

聞き取りを行い、特に支援が必要と認定した方に資金援助をしています。そのため、地域全体に広報することはせず、個人の携帯などに支援の通知をするのですが、このような事例があると、さらに細やかなフォローが必要だとトルコ赤のスタッフも痛感しました。また、別の被災住民、高齢のコチさん夫妻は、すでに多くの支援を受けていることへの感謝を述べつつ、「足りないものが多すぎて…。けれども、もっと必要だとは言えない」と、複雑な心情を話してくれました。コチさんは、地震以前は苦しいことがあっても誰かに相談することはなかったけれど、**余震と避難生活が続く中、トルコ赤による聞き取りによって不安が和らぐのを感じ、「こころのケア」の大切さを実感**したそうです。

トルコの被災地では、私が日本から来たことを知ると、多くの人が能登半島地震のことを気にかけてくれました。コチさんも「地震で大変なことになったね、心配してるよ」と、**自身が被災者なのに遠い日本に思いを寄せてくれ、トルコの人々の温かさ**を感じました。

地震発生から約1年がたち、世界の情勢が目まぐるしく変化する中で、世界だけでなくトルコ国内でも被災地の報道は減り、人々の関心は薄れてきています。しかし、いまだに困難な状況に置かれ、将来への不安の中で暮らす人々が数多く存在します。赤十字は世界から目を向けられなくなった地域でも、そこに苦しみを抱えている人がいる限り、寄り添って支える活動を続けていきます。



竹下 葉月

(たけした・はづき)

国際部 国際救援課

学生時代には東日本大震災のボランティアにも参加。今回トルコを訪れ、実際に自分で被災地を感じ、そこで生活を送る方々とコミュニケーションをとる重要性を改めて実感した。



日本からの寄付が活用され日赤が配備したランドリー車の前で住民に歓迎される竹下さん



赤十字の給付金を知って思わず竹下さんの手を握り、喜びと感謝を伝えるエズテュルクさん



仕事も家も失ったコチさん夫妻は、赤十字を通じて届いた日本の支援と「こころのケア」への感謝を話す